

# 金融市場動向

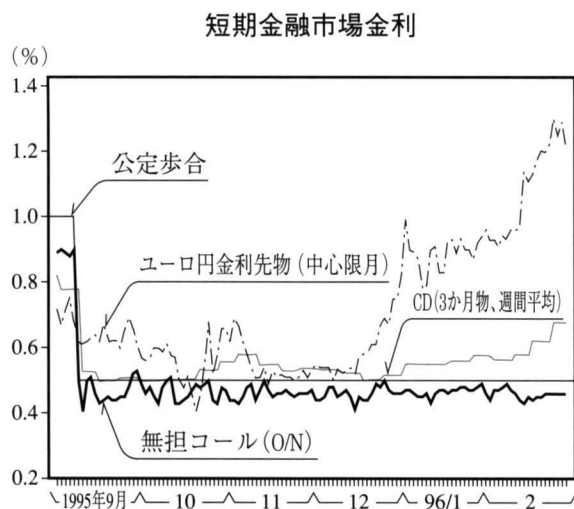
— 平成8年2月 —

(平成8年3月15日)

## 1. 短期金融市場

2月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、公定歩合をやや下回る水準で横這い推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、月央から強含み、月末には0.7%まで上昇した。ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、月前半は0.9%台で推移していたが、下旬には1.2%を上回る水準にまで上昇した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、38兆380億円と前月（38兆5,866億円）に比べ減少した。

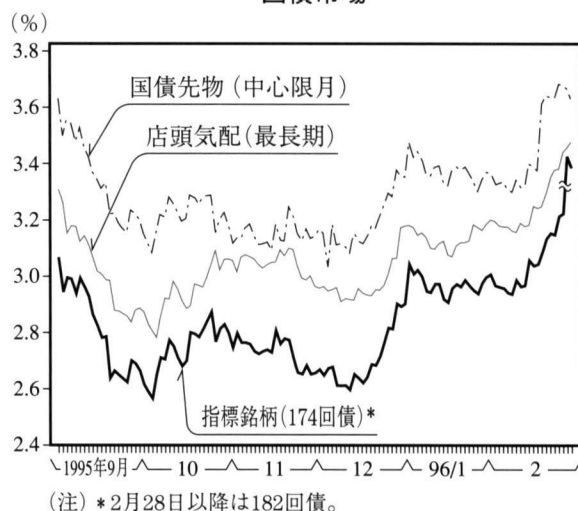


## 2. 資本市場

2月の長期国債利回り（指標銘柄利回り、指標銘柄は28日に174回債から182回債に交替）は、市場において金利先高観が強まったこと等から

中旬から下旬にかけて急上昇し、3.385%で越月した（前月末3.000%）。国債先物中心限月利回り（中心限月は20日に96年3月限から96年6月限に移行）は3.628%（終値117.40円）で越月した（前月末3.373%＜終値119.64円＞）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

既発債市場利回り  
— 国債市場 —



2月の株式市況（日経平均株価）は、上旬には米国株価の堅調や景況感の改善等を受けて21,000円を上回る局面もみられたが、その後は長短金利の上昇等を背景に軟化し、結局、20,125円と前月末（20,812円）を下回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、4.74億株（速報）と前月（5.16億株）を下回った。

### 株式市場



2月の国内公募普通社債は、金利先高観の強まりや、前月における発行手控えの反動もあって起債が集中し、月中8,570億円（1月1,810億円）の発行と既往ピーク（7年9月6,310億円）を大きく更新した。一方、国内エクイティ市場での発行（2月払い込み分、増資を除く）は、株価の持ち直し等を背景に一部で大型起債がみられたことから、高水準の発行となった（1月740億円→2月4,500億円）。

月初には107円台で推移する局面もみられたが、その後は強含みで推移し、104.58円（17時時点）で越月した（前月末106.92円）。円の対独マルク直物相場（東京市場）は、月中を通じ71～72円台でのみみ合いで推移し、71.22円（17時時点）とほぼ前月末（71.80円）の水準で越月した。

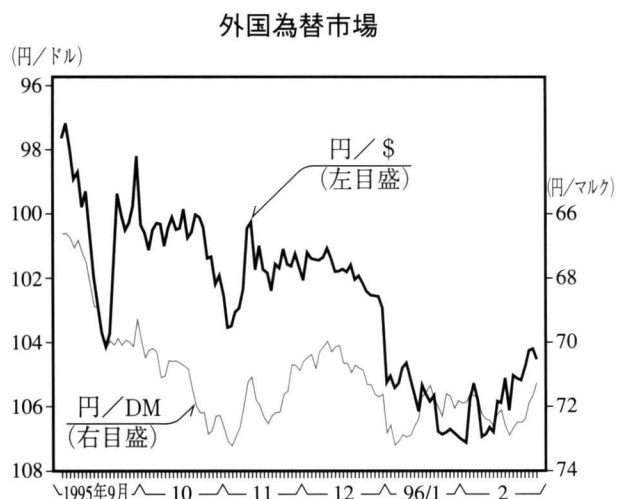
この間、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は241.4億ドルと、前月（258.3億ドル）を下回った。

## 4. 決 済

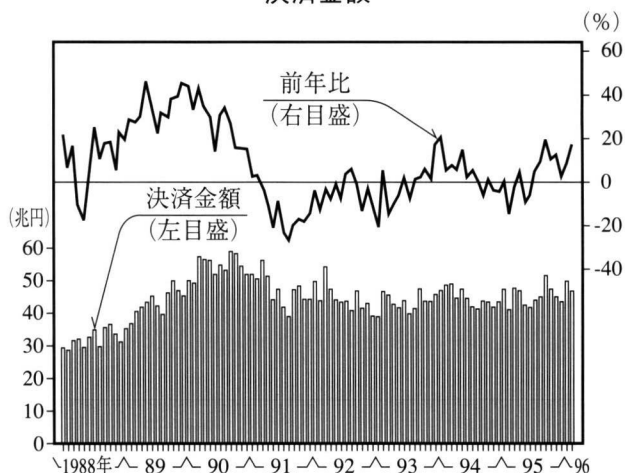
2月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を上回り（前年比+0.6%）、全銀システム取扱高も前年同月を上回った（同+8.6%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を大きく上回った（前年比+22.7%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を大幅に上回った（移転登録：前年比+18.9%、振込口座振替：同+38.8%）。

## 3. 外国為替市場

2月の円の対米ドル直物相場（東京市場）は、



### 決済金額



- (注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

## 5. 資金需給、金融調節

2月の資金需給をみると、銀行券要因が6,538億円の不足（前年同月1,844億円の不足）となり、財政等要因は4,111億円の余剰（同465億円の余剰）となったことから、全体では2,427億円の不足（同1,379億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行はCP買い入れ等により資金を供給した。

3月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因は月中2,000億円程度の不足（前年同月4,061億円の不足）となる見通しであり、財政等要因は、受入面で法人税を中心とする税揚げのほか、厚生保険料の受け入れ等が見込まれるものの、支払面で公共事業費等の年度末資金や国債の元利払い等の払いが嵩むことから、10兆8,600億円程度の余剰（同9兆2,284億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では、10兆6,600億円程度の資金余剰（同8兆8,223億円の余剰）となるものと予想される。

## 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

1月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比伸び率は+3.1%（速報）と前月に比べ0.1%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+4.0%（速報）と前月に比べ0.1%ポイント低下した。

2月の銀行券平残前年比は+9.5%と前月（+8.5%）に比べ上昇した。

2月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+3.6%と前月比横這いとなった。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比も+2.2%と、前月比横這いとなった（10か月連続の前年比プラス）。

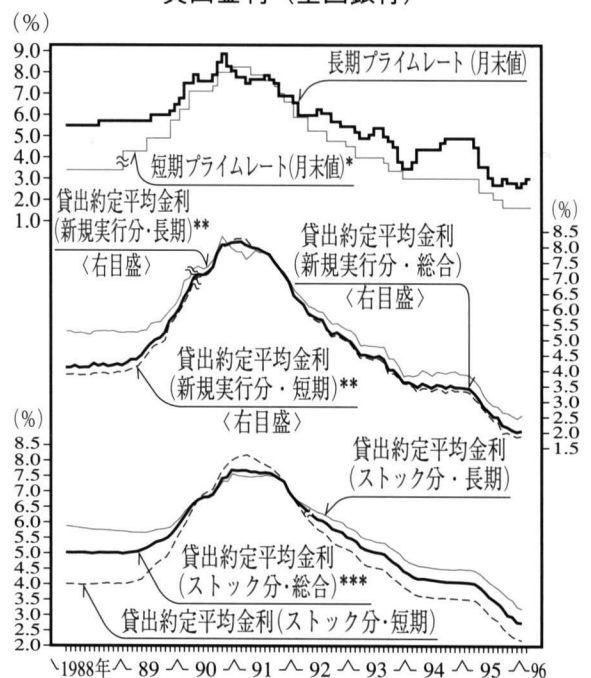
## 7. 貸出・預金金利

1月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分は、短期（前月比+0.045%）が3か月ぶり、長期（同+0.103%）が14か月ぶりに上昇し、総合では15か月ぶりの上昇となった（同+0.052%、12月2.017%→1月2.069%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越ともに低下し（短期：前月比△0.036%、長期：同△0.055%、当座貸越：同△0.020%）、総合では31か月連続で既往ボトムを更新した（総合：12月2.788%→1月2.749%）。

この間、1月の定期預金金利（自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀新規受入金利平均）は、前月に比べ低下した（12月0.490%→1月0.468%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) \* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

\*\* 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

\*\*\* 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)